

Hughes, R. (2011). 'Chapter 3 Approaches, materials and the issue of 'Real' speech'. *Teaching and Researching: Speaking. 2nd ed.* United Kingdom: Pearson ESL. pp.(49-79).

### 3.1 Introduction

- 言語教育におけるスピーキングの最優先の目的とは、学習者に目標言語を話すことができるようになることである。
- 目的は単純だが、実際は非常に複雑で、インタラクション、言語選択のレベルで「流暢な」話し手とは何を意味するかと捉えることに研究者の先入観が関わってくる。

### 3.2 What are our models and standards when we teach speaking?

- 口頭形式への考え方は Quote3.1 と 3.2 に代表される、異なる学派を生み出し、そのどちらともが口語の談話に特有な特性を認識しているが、その価値判断について異なった部分を持つ。
- 日常の会話にせよ、文学の大げさな言葉にせよ、それらは正しいモデルとしては捉えられず、口頭形式は独特のものであるがゆえに、その特性は学習者や教師のために望ましいものではないかもしれない。

#### Quotes 3.1 and 3.2 Two different perspectives on spoken grammar

- ・話し言葉では、文法と語彙が最小限に削減され、省略を含む不明瞭な形式を利用する。話し言葉の中で一般に起こる構成は、フォーマルな書き言葉において受容できるものではない。(Yungzhong, 1985: 15)
- ・口語文法は書き言葉の文法とは区別された独特の特質を持っており、コーパス上、独立したものである。ESL 教室で話し言葉を引き出すために書き言葉の形式をとったモデルをインプットとして使うことは自然なアウトプットのための希望になるかもしれない。コーパスでも同様に書き言葉のソースから収集されることになっている。(Carter and McCarthy, 1997)
- 2つ目の引用のケースでは、口語の 'uniquely special qualities' という用語が出てくるが、答弁（裁判の）に使われる口語形式は書面の形式と同等であるはずとみなされている。
- 口頭のモードに特有な教授形式が、慣用句や口頭表現の導入に対して、それらは学習者の構造的な知識の本質的な部分とはみなされず、他方では、口頭形式は学習者を導入すべき教師の語彙と文法構造よりも軽視されている。
- 口語文法や発音の指導のためのモデルとしてオーセンティックなスピーチデータは基礎である。Wallwork's (1997)、Carter and McCarthy's (1997)などが文脈に当てはまったスピーチデータをどの程度含むべきか決める本を出版しており、初学者へのグループワーク書として扱われている。
- 異なるコンテキストや文化的違いなどが導入の素材となるが、そうした意味では、学習者がスピーチを算出する活動に従事することが授業には必須であり、こうした活動が言語獲得を促進すると伝統的に考えられてきた。
- 対照的に、Carter and McCarthy's (1997)は、議論のために話される英語が起点として考えられ、作成

されている。そのために標準語を学習コンテキストに使っている。

- 教室で使用する教材として、それに対する高い信頼度を必要とするため、やはり標準語が学習する文脈に取り入れられるだろう。

### Quote 3.3 Are you good lover?

実例のため省略。

- この例は、学習者にとって魅力的なスピーキングイベントを提供する手段として表されている。そこで行われる口頭の相互作用は、それら自身教室活動の目的になる。

### Quote 3.4 Cooking rice

実例のため省略。

- 社会的、文化的に多様な状況における実際の話者によるインタラクションは、普遍的な口語形式と文脈や話者に特有である特徴を持つ。
- 一般に抽象的なレベルで文法を参照する傾向は、文法モデルを介して教えるために、「高い信望」の標準形式の影響を伝統的に受けている。
- 口頭形式の構造と、口頭で使われる語彙に関する議論についての適切な疑問は以下のようになる。
  - ・ どの方言、またはターゲットのアクセントを指導すべきか？
  - ・ もし正確さのモデルがあるのであれば、どんなモデルを使うべきなのか？
  - ・ どんなプラグマティックあるいは文化的行動モデルを使うべきか？
- リスニングクラスの素材として実際のスピーチデータを収集することや、学習者間の実際的なモデルの気付きを促進するための直接的なモデルとしてインタラクションの実例を使う際にはやや手間がかかることがある。
- もし学習者や教師は、目標言語として'ain't'や'bloomin' thing'のようなカジュアルな言葉やスラングのような言葉を学ぶことを望むかといえそうではないだろう。
- p58 に見られるような例は、どれも書き言葉より話し言葉で典型的に見られる形式であり、インフォーマルなものやあまりに古い表現などは大規模な対象を指導する際に不適切なため、それらは標準英語の指導シラバスからは除外されるものである。
- 話し言葉では、多くの形式が「過少記述」(省略が多い)になることが指摘されている。
- こうした口語文法の明らかに不適当なモデルと、教室での基準、つまり、多くの場合書き言葉に見られる基準の間のバランスが取られなければならない。
- 21 世紀になって、口頭形式と、特に口語文法への姿勢に関心が集まるようになり、コーパス言語学者と、談話分析者が数多くのスピーチに関する考え方を評価するようになった。
- 口語形式で見られる構造は、教室マテリアルのために自動的に作られたものではない。そこで、応用言語学、理論言語学の研究に加え、音に関する知識に変換する必要があった。

- 研究結果と教師らの知見に基づく、そして彼らの要求項目の間の「ギャップ」は特に明白であり、研究結果をシラバスに組み込む前に、スピーチのように動的で、社会的影響を受ける研究を行う際には、分析の立場を判断する必要がある。
- 教育コミュニティーは *he's a nice man, Harry is'* や *'good job you told me'* のような構造がどうかという見方にたどり着くだろうが、それは文法的特徴を中心とせず、上述の *'ain't'* のような扱いを受けるだろう。
- 口語文法を取り巻く問題の他に、発音指導の水準と口頭の規範についての問題があげられる。
- 流暢さは正確さと適合しないことがあるが、学習者にとって縛りのない、自覚的でない話をする機会が与えられることが実務上のゴールである。

### Quote 3.6 The problems of the communicative approach in relation to accuracy

**Communicative approach** は主として初期段階の語彙発達を強調するため言語構造を無視することがあった。第二言語習得は教室コミュニケーションやインタラクションを通じてのものという立場は、間違った発音、誤った語幹、或いは結びを使うか、それとも欠落がその後続く文を組み立てていることを着にかけているかというところではない。

- 明示的な文法教育が常に行われてきたが、発音と広い意味での流暢さの技能の指導は少なくとも 30 年の間にわたって変化がもたらされない状態が続いてきた。

### Quotes 3.7 and 3.8 Social aspects of fluency and pronunciation

- ・ 発音の改良の目的が、ネイティブの完璧な模倣をすることではなく、学習者に正確かつ容易に、そして楽に他の話し手に理解できるのに十分な発音をさせるようにすることが第一の目標であるべきだ。
- ・ 完璧なアクセントは望ましいものではないのかもしれない。なぜなら、潜在意識的に、個人、民族アイデンティティの主張として母国語のアクセントを維持することを望むケースもあるためである。

(Ur, 1996:52)

- ・ Shin(1989)は同程度の日本語能力の被験者(2名、英語母語話者)を元に、その能力について調査を行ったが、被験者Aは6年間の日本語教育を受け、数ヶ月だけ日本で過ごしたのに対し、被験者Bは日本生まれで12歳まで過ごしたが、フォーマルな日本語教育は3年のみであった。この2名を分析したところ、被験者BはAよりも多く口語形式を使用し、長い文章や適切なフィラーを使い、繰り返しが少なかったことを示した。被験者AのポーズはBよりも少なかったが、Bのポーズのほうが自然なもののように思われ、被験者BはAよりも多くのミスをしたものの、修正が少なく、特に文法的なミスを修正しない傾向にあった。(Lennon, 1990:398)
- 音素の区別に基づいた発音の間違いを修正するアプローチは、長く使われてきた手法で、現在も中心的なものである。外国語習得に関する発音指導の社会的、文化的側面は非常にセンシティブなもので、なかなか変化しない。

- 最近では学習者が L2,L3 として英語を利用してインタラクションを行うことが増えているため、ネイティブのモデルからより通じやすいモデルへとシフトしている傾向もあり、極端な例としては、Lingua Franca 話者が他者の発話を簡単に理解するのに対し、英語母語話者が簡単に理解できないこともあった(McCrum, 2006)。
- このような点から考えると、英語母語話者の Ownership は減少していただろうし、今後の言語教材に影響を与えるだろう。

### Concept3.1 Common core features and intelligibility

- ・Jennifer Jenkins (2000, 2006)はスピーチの特定の特徴が理解度にとって他の要素よりも重要だという分析を行い、そこで見つかったような特徴がスピーキングカリキュラムの焦点となるか否かについて議論が沸き起こった。どのような言語記述が非英語母語話者が英語を使うのに望ましいか、ELF 話者の間で好まれる言語に焦点を当て、NS 規範に当てはまるかどうかと疑問を呈した。
- しかし、こうした考えは近代的な教授理論の観念と適合せず、外部モデルと実践、そして「正しく理解すること」について焦点が当てられている。

### Quotes 3.9 and 3.10

#### The fundamentals of teaching pronunciation in the final years of the twentieth century

- ・話し手によって生み出される音の数は無制限だが、ある特定の音だけが特定の言語の話し手と聞き手に対して意味を伝えている。最も小さな音の単位は音素と呼ばれ、それは抽象的概念である。
- ・教員が教えようとしている音を聞いて、それを識別することができるようになることが学習者にとっての第一歩である。同じイントネーション、リズム感、ストレスを共通の目標とし、学習者の特性に応じて聞き分けることがどうか、というものである。(Ur, 1996:53)

#### Quote 3.11 Social and contextual aspects in the task of teaching pronunciation

- ・音声学が発音指導の専門的な裏付けとなり、特に優れたものが入門書や教師教育のコースで利用される。発音の役割を考慮することは教室設定の補助となるが、最終的に特定のマイクロ条件にマクロ条件が導かれる。
- 現在では英語母語話者のように英語を駆使する能力、共通のコア特性と通じやすさを獲得する個別の動機づけについて考慮が行われており、発音指導に関しても新しい手法が取り入れられている。